

認識的文脈主義と認識論について

福田佑二 (Yuji Fukuta) ・ 中山康雄 (Yasuo Nakayama)

大阪大学人間科学研究科

近年、認識的文脈主義 (epistemic contextualism) という立場が認識論の一分野として活発な議論的になっている。彼らのテーゼは次のように表現される (ここで特に想定しているのは、Stewart Cohen や Keith DeRose に代表される文脈主義の立場である)。

「S は P を知っている」という形式の文 (知識文) を真とするために要求される認識的地位の強さは、文脈によって変動する。それゆえ、知識文の真理条件は文脈ごとに変動する。

文脈主義者は、このテーゼがさらに懐疑論対策になると主張する。その非常に大雑把な理屈は次のようなものとなる。懐疑論者が、たとえば、われわれはあのシマウマに見える動物が偽装されたラバでないことを知らない、というような懐疑論的仮定を主張する際、それはいわば懐疑論的文脈において真として主張されているのであって、日常的な文脈ではわれわれはそれを偽として主張できる (すなわち、われわれはそれがシマウマであると知っている) と主張できる)。したがって、懐疑論者の言う知識の不可能性は少なくとも日常的な知識を脅かさない。

ところが、文脈主義のテーゼそのものは、知識帰属の真理条件を扱う意味論的なものである。その知識帰属のテーゼが、本来、知識そのものの不可能性を論じる懐疑論に対処する、とはどういうことなのだろうか。

この点に関して、Cohen と DeRose はともに、文脈主義が知識そのものを直接に扱っていないことを認める。彼らは、文脈主義は懐疑論論証の直観的なパラドクス (普段は知っていると思えるようなことも、懐疑論的論証を経由するとたちまち知らないことのように思える、というような) の原因を説明できる、と主張するに留めている。彼らの観点からすると、われわれが「知る」という言葉の真理条件の文脈変動に鈍感だからこのようなパラドクスが生じる、ということになる。つまり、その鈍感さゆえに、われわれは文脈の変動についていけず、あらぬ矛盾を直観的に感知してしまう (われわれは、意味論的盲 (semantic blindness) に苛まれている)、というのが彼らの説なのである。

このように、文脈主義者は、懐疑論的パラドクスを言語使用上のある種の混乱として捉える。そして、その限りにおいて懐疑論に対処している。

ところで、文脈主義は、懐疑論的パラドクスに対処するためだけの理論ではない。より日常的な言語使用における「知る」の真理条件の変動もその領分に含まれる。したがってたとえば、それが同じ知識文だとしても、専門的な資格試験の面接の現場と、井戸端会議

の現場とでは、それが真と見なされるのに要求される認識的地位は異なりうる、と文脈主義者は論じる。このような例についても人が何か矛盾を感じるとしても、それはひたすらにわれわれの意味論的旨に起因する、と文脈主義者は考える（矛盾を感じないならば、その人は根っからの文脈主義者だということになる）。

とはいえ、懐疑論的パラドクスにせよ、日常的なケースにせよ、これら知識帰属の変動性や、言語使用上の混乱の議論が、認識論にどのようなインパクトを持つのかという点に関して、彼らはそれ以上踏み込んでいない。しかし、文脈主義は歴史的にも認識論に端を発する立場であるし、現にいまも認識論の中で特に参照されている立場である。それゆえ、文脈主義と認識論の距離感を一度検討してみる必要があると私は考える。

この点に踏み込む上で、Jonathan Adler (2006) の議論が非常に示唆的である。

Adler は、文脈主義者が想定している文脈の変動によって変動しているものは、あくまで、その知識主張をすることで請け負うことになるリスクの大きさのみであると指摘する。つまり Adler は、文脈主義者は、普段は「知っている」と主張することもそこに責任が生じるならば「知らない」と主張することがある、というような心理的なためらいに焦点を当てているのであって、そこに認識的に注目すべき要素は存在しない、と批判するのである。

しかし Adler は、あくまで日常的なレベルの範囲内における知識帰属の変動性を念頭において議論を構築している。それゆえ、Adler の批判の刃は、文脈主義者が想定する懐疑論対策にまで達していないかもしれない。

私は、本講演でこの点に踏み込むことで、文脈主義と認識論との関係を論じる。Adler の指摘より、文脈主義者は、知識の内在的側面、外在的側面、あるいは社会的側面とは区別される、知識の実践的側面、合理的側面、心理的側面に光を当てていると見なすことができる。それゆえ、文脈主義は認識論をある仕方で拡張する足がかりになるように思われる。この点に関してもいくらかの展望を示したいと考える。

文献

Adler, J., 2006, "Withdrawal and Contextualism", *Analysis*, 66(4): 280-285.